

研修参加報告

地域包括ケアシステムにおける介護老人保健施設の役割と期待
～機能の違いによるポジショニングとソーシャルワーク～

平成 29 年 8 月 16 日
那覇市立病院 総合相談センター 伊禮 智則

支援相談員、医療ソーシャルワーカーそれぞれがお互いの施設機能や役割を理解し、地域包括ケアシステムにおける有効な資源として機能を発揮できるように連携方法を確認することを目的に、8/16 沖縄県医師会館にて、見出しの研修が開催された。参加者は MSW35 名、支援相談員及び施設ケアマネが 46 名で計 81 名であった。

プログラムは、沖縄県子ども生活福祉部高齢者福祉介護課米須氏より、地域包括ケアシステムにおける老人保健施設の役割、県 MSW 協会樋口氏より入退院支援連携デザイン事業の報告、シルバーピアしきな金城氏より介護老人保健施設の機能と現状、私は医療機関の種類と機能について報告した。後半はグループワークで締めくくられた。

印象的だったのは、米須氏が報告した、2025 年までの各地域の高齢化の状況の統計データで、沖縄県は 2025 年から 2040 に向けて 75 歳以上の方が急激に増えており、2040 年に向けて今のような対策をする必要があるかという指標だった。また、必要とされる介護職員が相当数足りない状況になることも数字でみると危機迫る状況だと改めて感じさせられた。地域包括ケアシステムが進む一方で、いったい何が地域包括ケアシステムであるかという問いも常にある。三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング資料より、地域包括ケアシステムが目指すものは、高齢者が尊厳を保ちながら、重度な要介護状態となっても、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができることと表現されている。米須氏は、2040 年に向けて①中等度者の予防、②団塊の世代をいかに看取るかが重要になると述べ、老健には在宅復帰支援強化と地域づくりが求められると期待した。地域づくりの視点が今後は重要になると感じ、医療機関も老健もその地域づくりの一端を担っているという意識が必要になると感じた。さまざまな場への参画、その積み重ねが地域づくりであり、地域をつくるということは、機関や職種で支援の線を引くのではなく、その支援のグレーゾーンをどうつづしていくのか、ケースごとに状況に合わせた役割分担、ポジショニングができるようにすることが必要だと感じさせられた。